

地域のイスラームの社会政治生活とその変容をとらえた重厚な労作であり、ロシア帝国内で営まれたイスラームの生活や、イスラームの激動の時代との格闘が実に生き生きと描かれ、知的興奮を掻き立てられる。それは、本書が圧倒的な量のイスラーム定期行物とロシア帝国の行政文書の渉猟と、最先端の理論的研究の批判的咀嚼に支えられているからである。織物に例えるなら、それらを縦糸と横糸として、実に丹念に全体のデザインを練り上げ、柄を整えて、織り上げられた大きな布が本書である。それは、ソ連解体以降、国内外で大きな活力を帯びて進展してきたロシア帝国論と中央ユーラシア近現代史研究の両分野において、著者が議論を重ね、鍛え上げてきたことの賜物だろう。

本書の特筆すべき点は、第一に、「公共圏」や「市民社会」といった概念を20世紀初頭のロシア帝国にあえて適用したことである。これについては、著者が序章で述べている通り、近年の公共圏や市民社会をめぐる議論の見直しを受けて、それらを「到達すべき終点に置くのではなくむしろ理念型として捉えることで社会と政治の変化を分析する方法」(8頁)を模索する立場を明確にしている。ただし、本書において公共圏と市民社会をどのようなものと設定して論を進めるのか、両者はどのような関係にあるのかが若干曖昧であるとの印象が残った。

また、ヴォルガ・ウラル地域のイスラームの事例を通じて、ロシア帝国の性格、1905年革命の評価、あるいはナショナリズム論などについて再考を促すような、大きな課題への挑戦も随所に見られ、そうした目配りは実に幅広く、また綿密である。

もう一点挙げるとすれば、歴史研究の作品でありながら、著者の現代ロシアひいては現代世界に向ける批判的眼差しと、人間がよりよく暮らせる社会の実現への希求が随所に感じられることである。それは終章の結びの部分で明確に表明されているが、私たちはなぜ歴史を学ぶのかという大きな問いにも関わることであり、そのような著者の姿勢と著述のスタイルも本書の魅力の一部である。

(帯谷 知可 京都大学東南アジア地域研究研究所准教授)

---

井筒俊彦『クルアーンにおける神と人間——クルアーンの世界観の意味論』(鎌田繁監訳、仁子寿晴訳)(井筒俊彦英文著作翻訳コレクション) 慶應義塾大学出版会 2017年 366+23頁

本書は、井筒俊彦が1964年に発表した英語著作 *God and Man in the Koran: Semantics of the Koranic Weltanschauung* (Tokyo: the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies, Keio University) の初の日本語訳である。*God and Man in the Koran* は1962年および1963年にマッギル大学で井筒がおこなった講義を元にしており [Rahman 2002: vii]、同書および *The Structure of the Ethical Terms in the Koran* (1959年、1966年に改訂版 *Ethico-Religious Concepts in the Qur'ān*)、*The Concept of Belief in Islamic Theology* (1965年) という相次いで発表された英語著作3冊は、井筒のイスラーム研究者としての地位を不動のものとし、イラン王立哲学研究所やエラノス会議での活躍に道を拓くことになった。

*God and Man in the Koran* が特に脚光を浴びた理由は、言語哲学に基礎づけられた意味論的分析を通じて、特定の時代の言語に内在する世界観を解明しようとする独自の手法に求められよう。このような井筒の方法は、聖書批判学に由来する方法とクルアーンの起源をユダヤ・キリスト教的伝統に求めようとする姿勢を特徴とする当時の欧米のクルアーン研究にも、クルアーン解釈学や文法学といった伝統的な宗教諸学をベースにしたイスラーム圏のクルアーン研究にもない斬新なものであり [竹下 1993: 160–162]、同書は双方の世界で高く評価され、「イスラームの立場に立つこともないが、「オリエンタリズム」的研究でもない独自のもの」として海外では今なお読み継がれている [鎌田 2017: 361–364]。

本書評では、『クルアーンにおける神と人間』の内容を概略した後、半世紀以上前に発表された著作が今日日本語に訳されることの意義、およびその日本語訳の特徴などについて私見を述べることにする。

本書の構成は以下の通りとなっている。

- 第1章 意味論とクルアーン
- 第2章 歴史のなかに配置されたクルアーンのキー・ターム
- 第3章 クルアーンの世界観の基本構造
- 第4章 アッラー
- 第5章 神と人間の存在論的連関
- 第6章 神と人間のコミュニケーション的連関 (I)
- 第7章 神と人間のコミュニケーション的連関 (II)
- 第8章 ジャーヒリーヤとイスラーム
- 第9章 神と人間の倫理的連関

第1章の主題は、意味論に関わる諸概念の規定とそれらのクルアーンへの適用である。意味論は「或る言語のキー・タームを、その言語を会話や思考の道具としてだけでなく、より一層重要な、周りを囲む世界を概念化し解釈する道具として用いるひとびとの世界観(Weltanschauung)を概念的に把握することへ最終的に至るために、分析的に研究すること」(7頁)とされ、クルアーンに関してはその「宇宙観の構造において決定的な役割を担ったと思われる概念群を精査することで」その「ダイナミック・オントロジー活き活きとした動的存在論を導く」(8頁)ことが目指される。決定的役割を担う概念としてはアッラー(Allāh)、イスラーム(islām)、ナビー(nabī, 預言者)、イーマーン(imān, 信仰)、カーフィル(kāfir, 不信仰者)などが挙げられる。言葉にはどこに現出しようが変わらない「基本的」意味の他に関連語全てとの関わりの中で意味論の色づけを帯びる「連関的」意味がある。キー・タームは単独で存在するわけではなく、「連関的」意味において他の語と連結され、一つの世界観のなかに諸概念の体系を形成する。それが「意味論的領域」(semantic fields)である。

第2章では、通時的意味論と共時的意味論について説明された後、クルアーンと関連づける形で、クルアーン以後に生まれた神学といった文化的産物における語彙の展開が参照される。通時的意味論においては時間の経過のなかでの語彙の変化が問われるが、共時的意味論では、歴史の流れを水平に切ることで得られる、一定数の語が形成する切断面が分析対象となる。本書においては、異なる二つの時代の切断面同士を比較することが研究の手法となる。

第3章は、クルアーン以後のイスラーム諸学における解釈を読み込まないよう注意を促し、クルアーンの世界観が概念対立という原理の上に築かれた体系であると説明した後、神/人間、ムスリム共同体/それ以外の共同体、不可視なもの/可視なもの、現世/来世といった概念対立について概略する。

第3章までの章は方法論や用語の説明、予備的考察に費やされてきたが、第4章からはいよいよ意味論に基づく分析が始められる。第4章が取り上げるのはアッラーであり、その「基本的」意味は「まさにこの神」(the God)であり、前イスラーム期にあった「基本的」意味の大部分はイスラーム教の体系にも受け継がれたことが示される。このような前提のもと、本章では続いて前イスラーム期のユダヤ教徒・キリスト教徒、多神教徒、ハニーフのアッラー概念が紹介される。

第5、6、7章は、前イスラーム期のアッラー概念や宗教文化を参照しながらイスラーム教の体系における神と人間の関係を分析する。第5章が主題とするのは人間の運命とアッラーとの関係である。第6章では、神と人間との間の非言語的コミュニケーションとしての自然の徴/記号(āyāt)、神的導き(hudā)、崇敬行為(ṣalātやdu‘ā’)が主題となる。第7章では言語的コミュニケーションとしての神の語り(啓示)について解説された後、イスラーム教の体系においては啓示を意味するワフユ(wahy)という語が前イスラーム期にはいかなる意味論的状况に置かれていたのか、そのような状況からいかにしてクルアーン的な啓示概念、そしてワフユとは反対方向の言語的コミュニケーションである祈り(du‘ā’)概念が立ち現れてきたのかが分析される。

第8章はまず、イスラーム教の体系においては絶対的統轄者に対して「卑く在って己を委ねること」を意味するイスラームあるいはその動詞形であるアスラマ(aslama)が初期のムスリムにとっては新たな生の領域への飛躍を意味していたことを示し、ジャーヒリーヤ期にはジャフル(jahl, イスラーム期になると基本的に「無知」を含意)の反対語であったヒルム(hilm)がイスラーム概念の前宗教的形態であった可能性について検討する。その上で、クルアーンの登場によってヒルム概念が後景に退く代わりにイスラーム概念が前

景化したと結論づける。

第9章は、人間との倫理的連関において神が見せる慈しみ、怒りという二つの側面に関わるキー・ワード群がクルアーンの登場によっていかに変質したのかを分析する。

最新のクルアーン研究の観点から本書の内容自体を評価することは評者の手には余る。「クルアーンをクルアーンに語らせ」「クルアーン自体の発する意味世界をクルアーンに従って取り出した」本書の積極的意義については、本書の解説[鎌田2017]がバランス良く概略しているので、そちらを参照していただきたい。井筒のクルアーン研究は当時の日本におけるイスラーム研究の水準をはるかに凌駕しており、国内においてそのクルアーン研究を批判する声はそれほど聞こえてこない。しかし、欧米の研究者の間からは全体としては評価しつつも一定の問題点を指摘する向きもあった[e.g. Partin 1970: 359–361; Rahman 2002: x–xi]。そのなかでも、歴史状況への配慮が欠けているという指摘などは傾聴に値しよう。当時の歴史状況と関連づけそのなかに位置づけようという姿勢が希薄なのは、テキスト自体に語らせようとする井筒の手法がもたらす必然的な結果なのかもしれない。とはいえ、井筒が原書を執筆した1960年代と初期イスラーム共同体に関する修正主義的な研究が現れ始めた1970年代後半以降では、ジャーヒリーヤ期や最初期のイスラーム共同体に関する理解の程度が違っていることもあり、読者はその点を補いつつ読み進めていくべきであろう。

次に、半世紀以上の時を超えて日本語訳が出版されたことの意義を二点ほど挙げてみたい。一点目は日本の知識人層一般にとっての意義である。日本の知識人層の間では井筒俊彦の思想家としての一面が目目されることが多く、特に晩年の井筒「思想」の結実たる「東洋哲学」が与えた影響は大きかった<sup>1)</sup>。クルアーンと神学に関する研究は1960年代までの英書三部作で一段落し、イランに居を移してからの井筒の主たる研究対象はスーフィズム哲学となる。1979年に帰国した後はクルアーンや初期イスラーム共同体に関する概説書も著しているが、仏教や中国思想などをも包含する「東洋哲学」の探求が大きな柱となっていく。井筒の「東洋哲学」からイスラーム教に触れる人は「東洋哲学」の一角を成すイブン・アラビー(1240年没)などのスーフィズム哲学には容易に親しめる一方で、クルアーンやイスラーム神学はほとんど「東洋哲学」とは別物のように映り、井筒を通じてそれらを知ろうとしても、手に入りやすいものは、最初期の著作かその改訂版<sup>2)</sup>、あるいは『イスラーム生誕』(1979年)、『コーランを読む』(1983年)など帰国後に書かれた日本語の概説書くらいであった<sup>3)</sup>。

井筒が研究対象としたイスラーム思想群のうちスーフィズム哲学は「東洋哲学」との相性が良かったが、クルアーンや神学の研究が井筒の研究や思想体系のなかに位置付けにくいのもであったことは確かであろう。この問題について鎌田[2018: 20–29]は、意味論を通じてある世界観から別の世界観への変容を見ようとしたのが本書を含む1960年代のクルアーン研究であり、意味の変化の根源を志向しゼロの世界から何らかの世界観の誕生を見ようとしたのがスーフィズム哲学研究であるとし、両者は意味論的研究の二つの型であると結論づける。鎌田の解釈はおそらく妥当なものであり、そうだとするならば、今回の翻訳によって、日本語を母語とし井筒の「東洋哲学」に関心を抱く読書人にも井筒のクルアーン研究が「東洋哲学」と地続きで連続したものであることが見えやすくなったと言えるだろう。

二番目の意義はイスラーム研究者にとってのものである。今回の翻訳は、日本のイスラーム研究者に井筒の方法論を問い直す良い機会を与えてくれたとも言える。本書の第1章と第2章を読めば分かるように井筒は自らが構築した新たな方法論の説明に多くの紙幅を割き、その理論の適用にも細心の注意を払って

1) この点で、まずはクルアーン研究者ついでスーフィズム哲学研究者と見なしがちな海外の井筒理解との間にはずれがある。また、池内[2007]は、井筒のイスラーム思想史叙述が日本人のイスラーム教理解とその実像との間に距離を生み出しやすいという問題点を指摘している。

2) たとえば広く読まれた概説書『イスラーム思想史』は1982年に発行されているが、これは1941年刊行の『アラビア思想史』を改訂したものである。慶應義塾大学出版会から全集が出る以前においては、国内で流通していた井筒の日本語著作のほとんどは1950年代以前の初期の作品か1979年以降の作品であった。

3) 『イスラーム生誕』と『コーランを読む』はともに *God and Man in the Koran* を元にした概説書であるが、後者は、ジャーヒリーヤ期とイスラーム期の世界観の変容に着目した *God and Man in the Koran* とは違い、人間の意識のレベルに応じてクルアーンテキストを分類しており、後年の主要な関心事であった「東洋哲学」の発想に引き寄せた著述スタイルとなっている[鎌田2018: 20–26, 29]。

る。欧米の一部の研究者が指摘しているような瑕疵がその記述にあったとしても、あらゆる方法論にはプラスとマイナスの両面があるものである。英語の原書が欧米とイスラーム世界の双方で読み継がれていることが示すように、井筒の方法論に少なくとも一定の有効性があることを否定する者はいないだろう。しかし、*God and Man in the Koran* が発刊された1960年代前半と現代の日本を比べれば、中東諸国の現地語で書かれた資料や欧米の研究書の所蔵数が大幅に増えイスラーム研究者の数も格段に増えているにも関わらず、イスラーム思想研究において井筒の意味論的アプローチを継承・発展させようとする者はほとんど現れていない。初めて世界的に評価された日本人のイスラーム思想研究者が井筒であり、注目の理由はその方法にあったことを考えると、この事実は奇妙なことのようにも思える。

評者はこの問題に対する明確な答えを見出せていない。だが、個人の雑感に過ぎない話ではあるが、もし自分が井筒の意味論の継承・発展を課題として与えられたとしたならば、ただただ途方に暮れてしまうことだろう。クルアーン研究において井筒の路線をさらに推し進めようにも、井筒が触れていない重要な「意味論的領域」を発見することは難しいであろうし、kuftのような分かりやすい事例が他に見つかるどうか覚束ない。意味論的アプローチを用いて井筒の議論を批判しようにも、研究自体は進んではいてもだからといって明瞭になったわけではないジャーヒリーヤ期の言語や思想文化には手を出しにくい。それでは、意味論的アプローチを他の時代、他のテキストに適用するというのはどうであろうか？ そのように考えたとしても、1冊のテキストの出現によって言語のあり方と世界観が一変してしまうような事例は、少なくともイスラーム圏ではクルアーン以外には見当たらない。強いて挙げるならば、9世紀以降のギリシア学術の大規模な翻訳活動や近現代における近代化／西洋化などが思い浮かぶが、クルアーン登場以前のジャーヒリーヤ社会ほど一変したわけではないだろうし、クルアーンに相当するような絶対的なテキストを見出すことはできない。思うに、クルアーン研究で井筒が示した方法論はクルアーンのテキスト分析に最適化されており、ある程度やりきったという思いがあったからこそ井筒は研究の重心をスーフィズム哲学に移したのであろう。井筒のクルアーン研究の継承と発展は非常にハードルが高く多くの困難が予想されるが、井筒の方法論を希有な才能を持った個人の特殊な手法として終わらせるのか、それともその発展・応用・一般化を目指すのかという問いに答えることは、これからの時代に生きる日本人イスラーム研究者全体に課せられた<sup>フアルド・キフアーヤ</sup>集団義務であろう。

最後に今回の翻訳そのものについて触れておきたい。日本語訳は丁寧かつ正確であり、ケアレミススの類もほとんど見当たらない。現代的でより平易な言い回しで翻訳するという選択肢をあえてとらず、井筒の文体、言葉遣い、漢字の使い方などがかなりの程度再現されており、訳者のこだわりが看取できる。原書にはない「クルアーン引用索引」およびアラビア語の語根順に配列された「原語索引」が新たに追加されたこと、特に後者については本書の性格を考えれば非常にありがたい。翻訳者である仁子だけでなく監訳者、音写や文献の点検者、索引作成者に対してもその労に謝したいところである。

また、仁子の元々の下訳には膨大な訳注が施されていたが、必要最低限の訳注以外は大幅にカットされたと聞く。本を商品として売る以上頁数が長大になることは避けなければならないという事情は理解できるし、残された訳注には読者の理解を深めてくれる有益なものも多く、出版社側も最大限の配慮をしてくれたのだろうと推察される。しかし、翻訳者がこれまでに残してきた注(いわゆる「仁子注」、たとえば劉智著『訳注 天方性理』イスラーム地域研究第5班「イスラームの歴史と文化」事務局、2002年などを参照)は、仁子の博覧強記ぶりが発揮された深い洞察に溢れており、本書のオリジナルの訳注が世に出ないのはあまりにも惜しい。読者の発展的な理解のためにもパブリシティの観点からも、オリジナルの訳注はウェブで公開するといった試みがあっても良かったのかもしれない。

#### <参考文献>

池内恵 2007 「井筒俊彦の主要著作に見る日本のイスラーム理解」『日本研究』36, pp. 109-207.

鎌田繁 2017 「解説」井筒俊彦(鎌田繁監訳、仁子寿晴訳)『クルアーンにおける神と人間——クルアーンの世界観の意味論』慶應義塾大学出版会, pp. 351-364.

——— 2018 「『東洋哲学』とイスラーム研究」澤井義次・鎌田繁編『井筒俊彦の東洋哲学』慶應義塾大学出

版会, pp. 11–32.

竹下政孝 1993 「井筒俊彦のイスラーム学における業績」『イスラーム世界』42, pp. 159–164.

Partin, Harry B. 1970. “Semantics of the Qur’ān: A Consideration of Izutsu’s Studies,” *History of Religions* 9(1), pp. 358–362.

Rahman, Fazlur 2002. “Review by Fazlur Rahman,” in T. Izutsu, *God and Man in the Qur’ān*. Kuala Lumpur: Islamic Book Trust, pp. vii–xii.

(菊地 達也 東京大学大学院人文社会系研究科准教授)

**黒田祐我『レコンキスタの実像——中世後期カスティーリャ・グラナダ間における戦争と平和』刀水書房  
2016年 x+436頁**

「レコンキスタ」は中世スペイン史の概念であるが、アンダルのムスリム地域への軍事的進出である以上、イスラーム史研究者にとっても無縁ではないテーマである。本書は、中世スペイン史研究の視座に立ちながらも、アンダルの史研究との対話を欠かさない気鋭の研究者による著作である。本書には、評者が把握した限りで、すでに5点の書評があるが、うち3点[阿部 2017; 内村 2017; 疇谷 2018]が西洋史研究者、2点[太田 2017; 野口 2018]が中東イスラーム史研究者によるものである。いささか出遅れた感のある本稿も含めれば、ちょうど半々の比率である。本書の内容が双方の分野の関心を引くことをよく示しているといえよう。

まず、本書の内容を簡単に紹介しよう。本書は、序論に続いて、本論が全三部、そして終章と結論という構成になっている。

「序論 「レコンキスタ」の歴史と「境域」史——中世スペイン史研究の回顧と中世後期「境域」研究への視座」(第一章～第二章)では、これまでの研究史を踏まえ、レコンキスタ研究が抱える問題と本書における著者のねらいが示される。著者の整理によれば、キリスト教徒によるアンダルの征服の過程を、西哥特王国とキリスト教信仰の再興をうたう「レコンキスタ理念」によるものと捉える伝統的な解釈には、1970年代頃から変化が見られ始めた。社会経済史的観点からの研究成果をふまえ、封建社会の成立と共に台頭してきた軍事貴族層による領土拡大意欲こそが征服の動機であるとする「新しい歴史」が登場したのである。こうした潮流に対して著者は一定の理解を示しつつも、それでもなお「レコンキスタ理念」が存在し続けたことは中世カスティーリャ王国においては否定しがたいこと、それゆえに事態は宗教対立か世俗的な対立かの二者択一では捉えきれないとする。そのうえで著者は、従来の研究が主な対象としてきた中世盛期ではなく中世後期、そして王権とその宮廷が存在する「中心」ではなくアンダルのと直接隣り合う「境域」に焦点を当てて議論を進めていくとする。

「第一部 中世後期におけるカスティーリャ王国・グラナダ王国間関係(1246～1492)——「戦争と平和」という観点から」(第三章～第七章)では、まず「中心」に焦点が当てられ、マクロな視点からカスティーリャ王国とナスル朝グラナダ王国の関係が戦争と平和の両方から分析される。両王国の関係はごく短期間の戦争と長期間の平和とから成っているが、著者によれば、だからといって両者が牧歌的な「共存」関係にあったとは言えない。中世という時代において大規模な戦争を長期間にわたって遂行することは不可能であり、休戦協定によって実現される平和は戦争と密接に関連したものであった。臣従や貢納を課す休戦協定は、グラナダ王国の弱体化や内政の不安定化を引き起こすものであり、将来的な戦争再開を見据えたものだったというのである。また、約250年間にわたる両王国の関係は14世紀後半以降に変化が見られることも指摘される。この時期にはマグリブ王朝のイベリア半島介入に終止符が打たれると同時に、カスティーリャ王国の新王朝トラスタマラ朝の歴代諸王が国内外の諸問題に忙殺され、直接グラナダ情勢に関与しなくなる。そうした中で両王国間の外交の現場では、現地情勢に通じた「境域」の民が前面に出てくるようになっていった。

続いて著者はミクロな「境域」に焦点を移す。「第二部 「境域」における「戦争と平和」——カスティーリャ・グラナダ「境域」社会の複合性」(第八章～第十章)では、近年進展の著しいアンダルシアおよびム